

子どものつくり出す「回す」遊びの世界 ～独楽からベイブレードまで～

- ◆企画：灰谷知子（附属幼稚園）
実践：伊川千晶（附属幼稚園）

◆はじめに

引き独楽を楽しんだ経験から始まって「回す」ことに夢中になり、仲間と刺激し合いながら続いていった遊びを振り返り、コンピテンシーの観点で考察する。

◆活動・遊びの紹介

本園では季節の遊び、また昔から親しまれてきた正月遊びの一つとして、各学年の2学期後半から3学期にかけて、個人持ちの独楽を教材として取り入れている。3歳児は手回し独楽、4歳児は引き独楽、5歳児は投げ独楽と発達段階に応じて変えている。

◆事例1

ブロックでつくるベイブレード

4歳児2月

3学期に入り、子どもたち一人一人に引き独楽を渡すと、はじめは「全然できない！」と嘆いていたが、一人が回ったことをきっかけに、僕も、私もと引き独楽回しがブームとなった。それぞれのタイミングで挑戦し、一度コツをつかむとそれからは何度も何度も回し、反対向きに投げてキノコ回しをして見せたり、手に乗せてみたりと技を考えるようになり、また友達と最後まで回るのは誰かと対決を楽しむようになっていった。

そんな中、ニューブロックで「ベイブレードを作った！」とオリジナルの形の独楽を作り、それを回すことを楽しむ人が出てきた。どのような形にするかで回った時に見える形が違ったり、重さ、長さで速さが違ったりと、様々な発見を楽しみながら作り、対決をする子どもたち。数名が中心となって細々楽しんでいたが、徐々に色々な人に広がっていった。



【考察】

引き独楽は4歳児全員に用意し、それぞれの子どもがやってみようと思ったタイミングで渡した。使わないときは、それぞれ自分の引き出しにしまい、やろうと思った時に、いつでも出してきて遊べるようにした。紐を撒くことも難しく、当初はできないと投げだすこともあったが、友達が回せるようになる姿を見て、再び挑戦してみることも多くあった。教師は、それぞれがやりたいと思うタイミングを待ち、そのタイミングで応援したり、時には一緒に手を添えたりして支えてきた。回せるようになりたいという一人ひとりの「今」の思いを逃さずに支えることが、自信につながったと考える。

そんな中、ニューブロックという遊具で独楽を作り始めた子どもたち。ニューブロックは様々な色、形があり、2学期中旬より、保育室の遊具の一つとして取り入れたものである。繰り返し使ってみる中で、乗り物や街、お家など、様々な使い方や楽しみ方を見つけて遊ぶ姿があった。このニューブロックを、自

分のオリジナルの独楽づくりに取り入れたことが興味深い。自由に作り、そして作り変えることのできる遊具であるからこそ、夢中になって遊び続けていったと考える。教師と一緒に遊びながら面白さや驚きに共感し、互いの発見を見合えるような環境を整えて支えた。回し方や力加減を変えながら何度も回す中で、重さや形による速さの違い、色の変化を体感していった。また友達と自分の独楽の回り方の違いを感じる中で、試行錯誤を繰り返し、探究して遊ぶ楽しさを見出していったと考える。

ベイブレード

5歳児5月

4月、年長組に進級し、大きくなったことが嬉しそうな子どもたち。そんな中、ペットボトルの蓋、ビニールテープやセロテープの芯など、色々なものを回して遊ぶ子どもたちがいた。ペットボトルの蓋を二個つけたものを「ベイブレード作った!」と言って回して遊びはじめた。ビニールテープで色付けをすることで自分オリジナルの独楽となり、回していくうちに日に日に速さが出ることを繰り返し楽しんだ。作ること自体は難しくないのに真似をする人が現れたものの、なかなか回せないために多くの子どもには広がっていかなかった。



しばらくたった5月頃、お弁当の後のおなか休めをしていたある子どもが久しぶりに『ベイブレード』をやってみたところ、「回った!」と大興奮。お弁当の時間でクラスの皆が保育室の中にいたこともあり、そこに皆が注目した。お弁当を食べ終わった人が次々と挑戦し始めたところ、さらに何人かが初めて回せるようになった。その後、再びクラスでベイブレード作りが盛り上がり、いろいろな人が遊ぶようになっていった。A児は、はじめのうちは思うように回らずイライラし、「違うの作る!」とたくさんのペットボトルの蓋を抱えていた。しかし家でも幼稚園でもやってみることを繰り返し、長く、速く回るようになっていった。互いを見合ったり、教え合ったりする中で回せるようになる子どもが増え、友達と一緒に「3, 2, 1, ゴーシュー!」と掛け声をかけながら対決を楽しむようになっていった。



【考察】

身近な素材であるペットボトルの蓋。これを組み合わせれば誰でも作ることができるし、ビニールテープで色付けすると自分のオリジナルのものとなる手軽さもあった。しかし引き独楽やニューブロックとは違って、簡単には回らない。なぜなら、ペットボトルの蓋には、目に見える軸がないからである。指先の感覚、バランス、力加減など、微妙に調節しながらペットボトルの蓋を回すことで、自らが軸を見つけなければいけない。回転して起き上がり、軸をつくり出して回るペットボトルの蓋に子どもたちは夢中になり、何度も挑戦して遊び続けていった。

テレビ放送しているアニメの影響もあり、子どもたちはこれを「ベイブレード」と名付け、自分たちの遊びの一つとしていった。興味をもったことを、遊びとして作り再現していく姿は、自分たちで遊びや暮らしを創り出していき、幼稚園での暮らしそのものであると考える。

回らないと一度は諦めていた子どもも、心の内には回せたらいいなという思いをもっていたのだろう。だからこそ、回せるようになった子どもの興奮に触発され、再び挑戦を始める子どもたちの渦ができていった。回せない悔しさやもどかしさ、回せた嬉しさなど、皆が心の内にもっている思いが伝わり合い、いろいろな友達との関係を広げながら、見合い、教え合い、切磋琢磨し、繰り返し挑戦していく達成感を味わっていったと考える。

◆おわりに コンピテンシー育成の観点より

「独楽」に取り組むタイミングは一人ひとり違うものであった。その子自身から沸き起こる思いを逃さず、十分な時間を保障して教師は援助をしてきた。だからこそ子どもたちは繰り返し挑戦したり、一度諦めても再び挑戦したり、できたという達成感を味わったりしていった。これは「自分でも頑張れば様々な成果を得られるという感覚をもつ」という「内的統制感」につながるだろう。

また、個々の挑戦を互いに見合える環境を整え、教師も一緒に輪に加わりながらそのような子どもたちの関係づくりを支えてきた。これは「個人では得難い成果をグループ全体で得るために、役割を分担したり、助け合ったりする力」という「協働力」の芽生えにつながるのだと考える。

軸のない「ベイブレード」を回す遊びでは、自らの手先に心も力も集中をさせながら、ものと向き合う子どもの姿があった。繰り返し挑戦し、ものと対話的に関わる中で、そのものの軸を自ら見つけ出していく姿は、子どもが自らの足で立ち、遊びや暮らしをつくり出す、すなわち主体性を発揮する力と重なるものであろう。つまり、このような遊びや暮らしの中で、子どもたちは「自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する力」である「エージェンシー」を育てていると考える。